

今年の6月19日は、今なお、若い女性を中心に、人気抜群の作家太宰治の「生誕百年」に当たり、生誕100年を記念し、「永遠の文学」を生んだ太宰に思いをはせた行事が、太宰の故郷・五所川原市金木町にある芦野公園をはじめ、各地で行なわれました。

太宰治の作品の中に、皆さん良くご存知の「走れメロス」という短編小説があります。話は、

「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐（じゃちぼうぎゃく）の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。」

で始まり、

「王の暗殺を企てますが、逆に衛兵に捕らえられ、即刻処刑されることになります。」

しかし、メロスは親友のセリヌティウスを人質として王のもとにとどめおくことを条件に、妹の結婚式に出るため三日間の猶予を願い出ます。王はメロスを信ぜず、死ぬために再び戻ってくることはないと思いつつも、メロスの願いを聞き遂げます。

メロスは妹の結婚式からの帰途で、川の氾濫による橋の決壊、王の差し向けた刺客や山賊の襲来などの度重なる悪条件に出遭います。

メロスはそのために心身ともに困憊し、一度は王のもとに戻ることをあきらめかけますが、その都度、自分自身が、かの人間不信の王がいう『醜い人間』そのものであることに気づき、人間不信の王を見返すことと、自分を信じて疑わない友人の命を救うために、走り続けました。」

と続き、メロスは日暮れに町へ到着し、友と王との命を懸けた約束を果たします。結果、群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめていた暴君ディオニスの心を動かし、

「やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

と王の気持ちを変えたということです。そして、

「ひとりの少女が、緋（ひ）のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。

メロス、君は、まっぴだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。

勇者は、ひどく赤面した。」

と結び、末尾に「古伝説とシルレルの詩から」と記述しています。

しかし、古代オリンピックでは、競技者が裸体で競っていたことから、作者が引用したギリシャ神話には、メロスに勇者に対する儀礼として、王の命に遵い、少女が、緋のマン

トを捧げてたとのみ書かれており、勇者も赤面することはなかったのではなかったかと思っ  
ています。

ところで、2016年夏のオリンピック開催地を決めるIOCの総会が、9月2日デンマーク・  
コペンハーゲンで開かれ、リオデジャネイロが選ばれました。日本は大阪・名古屋に続き  
東京でもオリンピック招致に3連敗、招致活動に問題はなかったのでしょうか。アメリカ  
では、早速、オバマ大統領批判が噴出しています。日本も石原都知事に対する批判も出  
ているようです。

嘗てのアテネのように、大阪一つに的を絞り、招致活動を長年続けていたらとも思いま  
す。しかし、リオデジャネイロの強みは、何と云っても、南米でオリンピックは始めてと  
いうことには、最初から他3都市には勝ち目がなかったとも思います。



#### 奥羽日報：「太宰文学永遠に 生誕祭で除幕式」(6/19)

「人間失格」「斜陽」「走れメロス」など今なお読み継がれる数々の作品を残した作家太  
宰治の「生誕百年記念祭」が19日、太宰の故郷・五所川原市金木町にある芦野公園で行わ  
れた。

生誕100年を記念して制作した銅像を除幕、ゆかりの人や太宰文学のファンらが生誕を  
祝う花をささげ、「永遠の文学」を生んだ太宰に思いをはせた。

同公園の太宰文学碑のすぐ近くに設置した銅像の除幕式では、銅像を制作した文化勲章  
受章者で彫刻家の中村晋也さん（鹿児島市在住）らが像に掛かった白い幕を引くと、高さ  
約2メートルのブロンズ製の太宰の全身像が姿を現した。…… <後略>



#### 朝日：「シカゴ最下位 オバマ大統領を野党やメディア批判」(9/3)

16年夏季五輪の開催地を選ぶ国際オリンピック委員会（IOC）の2日の投票で、シ  
カゴが最下位に沈んだ。オバマ大統領は出身地での開催に向けて陣頭に立ち、最後はコペ  
ンハーゲンにまで出向いただけに、オバマ氏の威信は傷ついた。野党・共和党からは内政

や外交の不調にもかこつけ、大統領の指導力に疑問を投げかける声も出ている。

「スポーツで最も価値があるのは素晴らしい試合をすることであり、勝てないこともある。心からリオデジャネイロを祝福する」

オバマ氏は2日、コペンハーゲンから帰国し、ホワイトハウスでシカゴの落選についてこう語った。記者の質問は受け付けなかった。

…… < 中略 > ……

米紙ニューヨーク・タイムズは「大統領は金メダルだけでなく、銀メダルも銅メダルももたせなかった」としたうえで、「なぜ大統領はこれだけ多くの時間とカネ、大統領の威信までかけて勝ち目のない努力をしたのか」と疑問を投げかけた。



2日、コペンハーゲンでの国際オリンピック委員会(I  
OC)総会から帰国し、米メリーランド州の空軍基地  
に降り立ったオバマ大統領夫妻=AP

### 春秋：「世紀の祭典」(10/4)

狐狸庵先生こと遠藤周作は、背泳ぎの様子を「選手はスタート台に立った、うしろむきに飛びこんだ」と書いた。かくもスポーツ知らずだった先生でさえ筆をとり、「戦争中の報道班員のようにみんなが駆りだされていく」と述懐した。

作家や詩人40人の観戦記や随想を集めた「東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典」という本にある文章だ。一体に斜に構えているはずの文筆家が、言葉は悪いが猫も杓子(しゃくし)もこぞって五輪を語る。それが45年前のムードだった。もうこんなことはなからう。「世紀の祭典」だって、ほとんど目にしなくなった。

2016年の夏季五輪は東京に来ないけれど、アジアの北京、欧州のロンドンに続くのがリオデジャネイロ、とは理にかなっている。「南米初の五輪を成功させ、一等国の仲間入をする」というブラジル大統領の涙声は、アジア初の五輪に未来をかけたかつての日本の思いにも重なる。リオには祝意を送りたい。

今回、都民の五輪開催への支持率は4候補の中で最低。56%はリオやマドリードの85%と比べいかにも見劣りした。五輪で成長した東京が今度は成熟した都市として新しい理念の五輪をデザインする。2020年に向けた再挑戦はあってもいいが、まずは都民の心に五輪への熱い思いが生まれてからのことである。

< 遠藤周作 (1923-1996) >

小説家、批評家、劇作家。東京府北豊島郡西巣鴨町(現在の東京都豊島区北大塚)生まれ。伯母の影響でカトリックの洗礼を受ける。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。



1955年に発表した小説「白い人」で芥川賞受賞。

無類のいたずら好きとしても知られ、全員素人による劇団「樹座」や素人囲碁集団「宇宙棋院」など作家活動以外のユニークな活動を行う一方で、日本キリスト教芸術センターを立ち上げるなどの社会的な活動も数多く行う。

キリスト教を主題にした作品を多く執筆し、代表作に『沈黙』『海と毒薬』『侍』『深い河』などがある。

### 天声人語：「五輪の新天地」(10/4)

昔あった大学入試の合否電報ふうには、「人魚姫ほほえまず」といったところか。デンマークでの国際オリンピック委員会総会で、東京は2016年の開催地に落選した。ほほえみを得たりオデジャネイロは南米初の開催になる。

残念な人も多いだろうが、祝福したい結果である。「五輪の歴史に新しい大陸を仲間入りさせてほしい」とブラジルのルラ大統領は語っていた。ちょうど50年前、「アジア初」を訴えて開催を勝ち得た日本の姿に、その言葉は重なっていく。

あのとき日本は、「五輪という花を初めて東洋にも咲かせて、五つの輪を完璧(かんぺき)なものに近づけてほしい」と支持を広げた。五輪の理念と響き合う訴えには、やはり力がある。決選の投票ではリオが圧勝し、さらに一步「完璧」に近づいたといえる。

ブラジルは2014年にサッカーのW杯も開く。すぐあとの五輪開催は、盆と正月が立て続けに来るようなものだ。胃もたれしないか心配になるが、そこはお祭り好きの国。大いに張り切り、楽しむだろうと知人のブラジル通は見る。

かつてリオを旅した三島由紀夫は名高いカーニバルに圧倒された。「ホテルの窓を閉めたって、眠れるところではない」「日本人は、腰を抜かす他はない」と、リオっ子の気質と熱気に脱帽している。人々が「祭り疲れ」する心配はないようである。

日本からの移民が多く縁浅からぬ国である。もろもろの課題を克服して、五輪の新天地でどんな大会を見せてくれるのか。サンバのリズムなど思い出しながら、はや興味は尽きない。

< 三島由紀夫 (1925-1970) >

本名平岡公威。小説家・劇作家。東京市四谷区永住町(現・東京都新宿区四谷)生まれ。

東京大学法学部(旧制)卒業。

1949年、書き下ろし長編小説『仮面の告白』を出版、高い評価を得て作家の地位を確立。唯美的な作風が特徴。

晩年には民兵組織「楯の会」をつくり右翼活動に傾倒、1970年、楯の会会長として自衛隊にクーデターを促し失敗、割腹自殺を遂げ世間を騒然とさせた(三島事件)。

代表作は小説に『仮面の告白』、『禁色』、『潮騒』、『金閣寺』、『鏡子の家』、『豊饒の海』四部作など。戯曲に『サド侯爵夫人』、『わが友ヒットラー』、『近代能楽集』など。



### 編集手帳：「朧の幻影」(10/4)

人生は一冊の本にたとえられる。英国の詩人ジョン・クレアは過去を悔いる気持ちを、「人生に第2版があれば校正をしたい」と言い表した。「人生の一ページ」という耳慣れた言い回しもある。

胸に深く刻まれる出来事は「朧(しおり)」かも知れない。卒業、初恋...過去を顧みるたび、そのページがきまって開かれる朧を、誰もが自分だけの本に挟んでいる。

災害や事件のように、同時代の空気を吸った人々が共有する朧もある。美しい朧を7年後の子供たちに贈れなかったのが残念でならない。2016年夏季五輪の招致に、「東京」が敗れた。

敗戦の焦土から立ち上がり、平和の祭典に臨む。45年前の東京五輪のような、国民の心を束ねる糸がないまま、招致の熱が沸点に達しなかった印象も残る。

多くの人が足し算をしたはずである。自分はいま何歳、子供は何歳、7を足してそれぞれ何歳、生活は、世の中はどう変わっているだろう...。今日を生きるのに心せかれるご時世に、少し遠くを見つめる時間をもてたことは無駄ではあるまい。朧の幻影を追いつつ九分九厘は負け惜しみで、残る一厘は心から、そう思う。

<アーサー・セントクレア(1793-1864)>

イギリスの貧しい小作人の家に生まれる。

時代を先取りし、自然と社会に対する卓越した洞察力と得意な想像力のロマン派大詩人。

強烈な自然愛と人間愛のために、社会から狂人扱いされ、さらに失恋経験が精神に異常をきたし、精神病院に入れられる。

テーマは民衆への共感・社会批判・エコロジック的自然観・恋愛観・詩の永遠性と想像力の関係・喜びの喪失感と自然及び政治との関係・名声と詩人の人生・詩的想像力と現実世界の関係・こどもからおとなへの変化・時間と永遠世界としてのエデンの関係など多岐にわたっている。



### 余祿：「リオ五輪開催決定」(10/4)

「アジアの一角に全世界の若者が集まるとき、世界は平和の幕開けを迎える」。柔道の父でI O C委員だった嘉納治五郎は世界にこう訴え、東京五輪招致に成功した。結局は戦争で流れた1940年の「幻の東京五輪」のことだ。

この時、嘉納は「五輪は当然日本に来るべきだ。もし来ないなら正当な理由が退けられたことになる」と気を吐いた。欧米選手の移動の困難を理由にアジアでは開けぬというなら、五輪は世界の大会といえない。これまで遠路参加してきた日本も出場の必要はなくなるというのだ。

五輪の大義を正面に掲げて各国委員の共感を得た嘉納の記憶は、64年の東京五輪の開催決定にもモノをいったとされる。そして皮肉なことに2016年五輪で東京を落選させたのも、嘉納がI O Cに残した真の世界大会の理想かもしれない。

開催地に選出されたのは、「南米初の五輪開催」を掲げてきたリオデジャネイロだった。混戦といわれた招致合戦である。だがその最後の決め手は、欧米偏重の開催地選びを指摘し、五輪の新たな歴史を作ろうというリオの呼びかけだった。

なにせカーニバルで知られる祭り好きの土地柄だ。コパカバーナのビーチには5万人が集まり、14年のサッカーW杯大会に続くスポーツの祭典開催をサンバの合唱と踊りで祝った。「ブラジルはもう途上国ではない」といったストレートな喜びようもなにやらまぶしく、懐かしい。

「環境五輪」を掲げた東京だが、「当然こちらに来るべきだ」という迫力はリオに遠く及ばなかった。ここは南米初の五輪を世界と共に祝い、その成功を応援するのが、嘉納ら先人のつちかった五輪精神に沿う道だ。

< 嘉納治五郎 (1860-1938) >

講道館柔道の創始者「柔道の父」。摂津国御影村（現・兵庫県神戸市東灘区御影町）生まれ。東京大学文学部哲学政治学理財学科卒業。

1877年天神真楊流柔術に入門、1881年から起倒流に学ぶようになり、柔術二流派の技術を取捨選択、崩しの理論などを確立し、独自の「柔道」を作る。

1882年囲碁、将棋から段位制を取り入れ「精力善用」「自他共栄」の言葉を掲げた講道館を設立。

柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど、日本に於けるスポーツの道を開いた。

